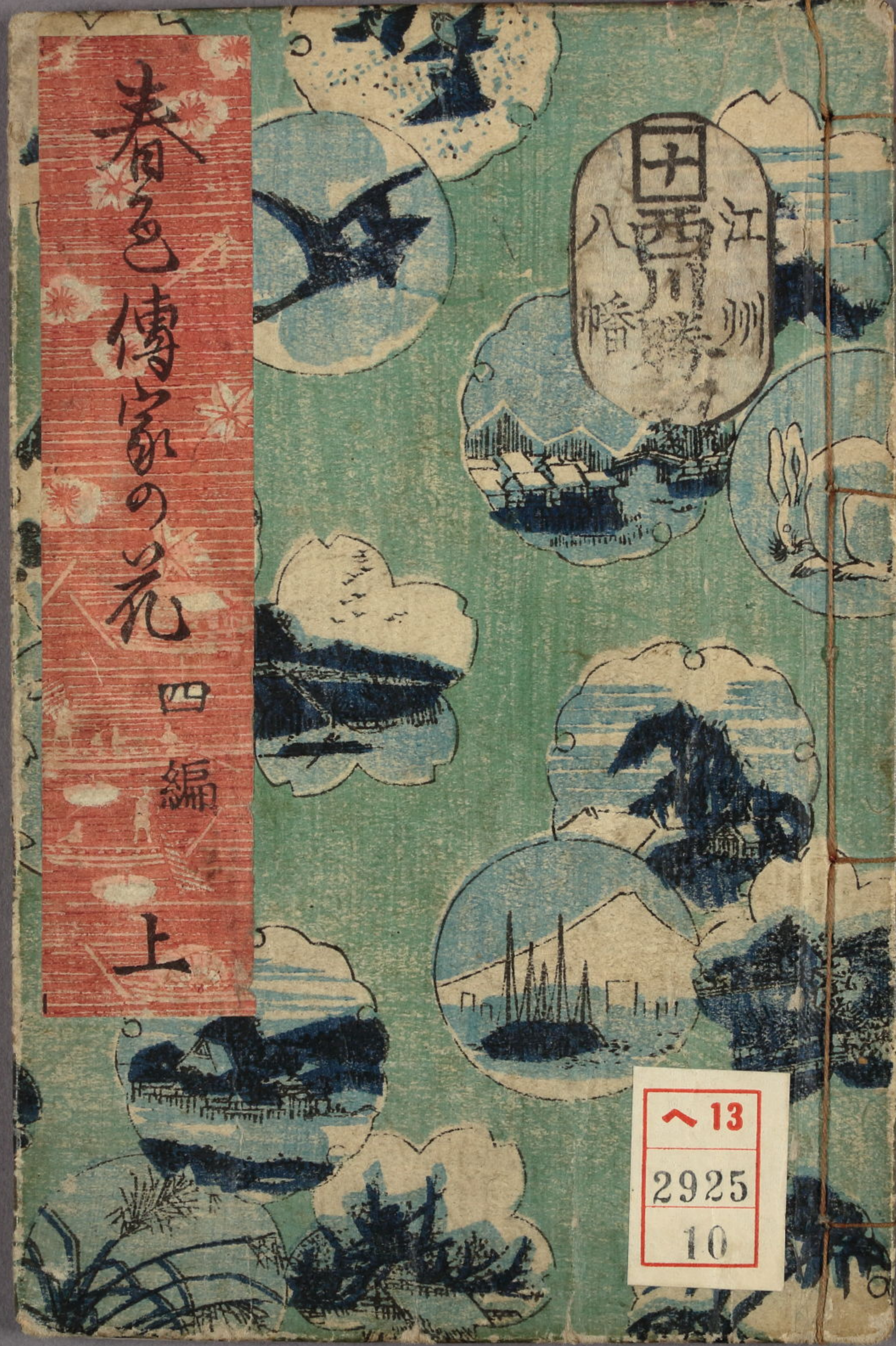




門 へ 13
 2925
 卷 10

昭和九年
 七月六日
 晴末

まゝに傳ふの花は編序
 むの推潭の橋解のり
 橋のおる柿の舞の解の拾ひ
 解のこも子といふおのこも子
 まゝの頃もとる名もとる赤心を
 まゝのいふもいふおのこも子の橋本

推取の縁ある版権取の苗金に替へ
極せんまゝに荷し初局より一掃
手紙書つる丹珠ふたひかに研おる
す野の信てもいふ花を解り松を
現すいふも大崎の傳家の
一掃の権取の苗金に替へ

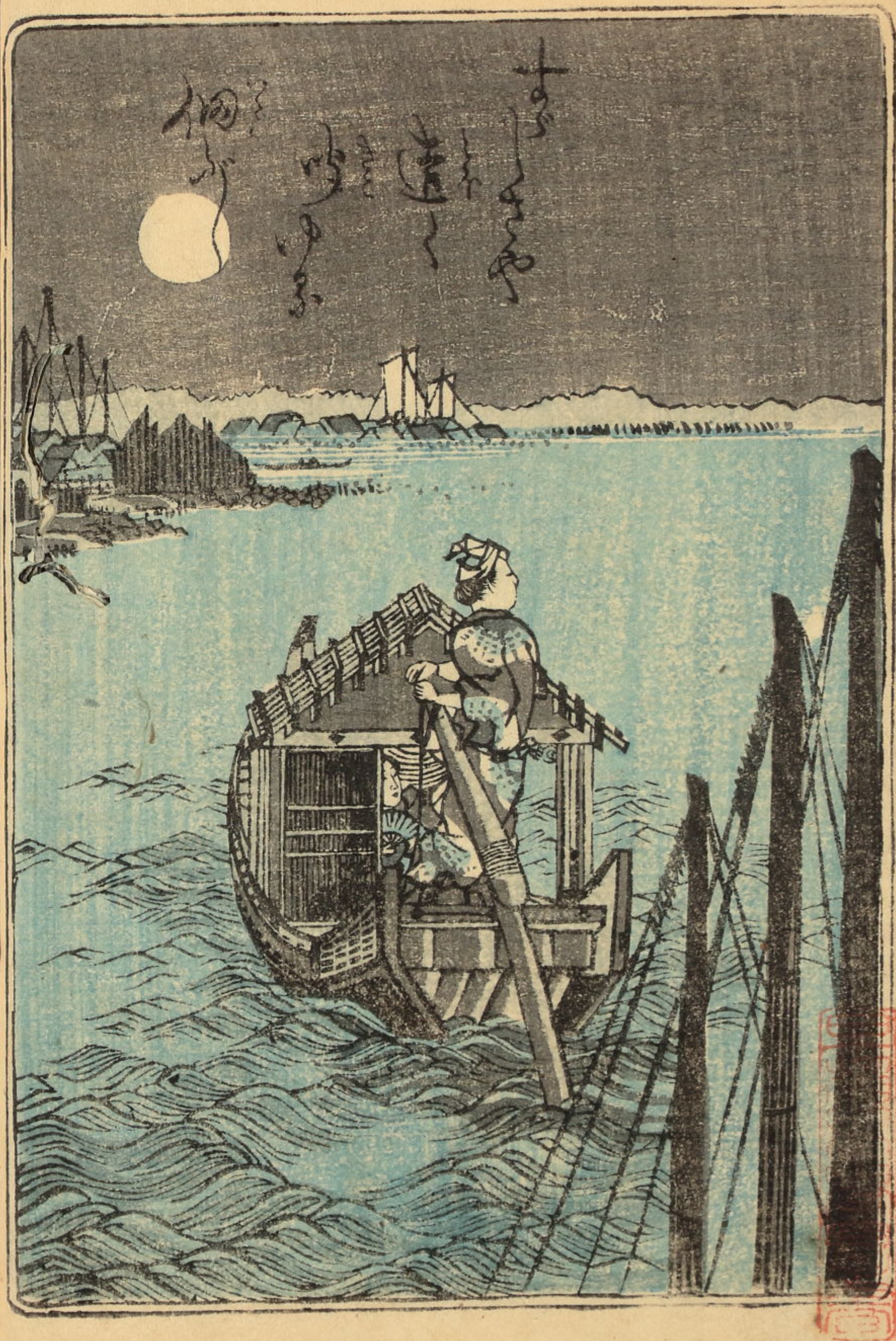
福あまきと鳥のいふもいふ
れを今編みて伸とねる本をね猿
の毛け細きこの筆の操と人志似
志くも世に出る先序文といふ
さや志といふ

東部狂言

為水春水誌







春色傳家の花巻之十

江戸 為永春水著

第十九回

何ぞく小万が身の上をうく尋ねる小所ハ同
 ト 秘金のかの和歌丁小遠うねバ場末あつても
 野あうぬ新攘年増ちあづ何でも撰取緑町ふ
 最もわ中さ新乃ありそ中程ふらうと格子
 造りの一室へ金ハ掛のど何とや馬時な好その造

それ 丈も お茶んハ女小可也うしろがうまる事ハハ様さまの久
来 寔じつハ大好サだいこう 丈も 何なになせんあふ望のぞくをう
くお在いるものへ 来 ども けのやうなふきや
小揃こぞろつと 果はるやうな衆人しゆじんの女もねううまひゆ
恥はをかくも 外ぐわい笑わらかうりと思おもつと 抛なめく 幸防しんぼうく
居いるハサ 来 ヤハ茶んも上げらる候うそ 實じつでかいで
あるヨ 實じつハ浮言うきごでも 何なんでもありませんが子男こなんづりハ
ヤセふ及およびまを後あとに傳つたへるまでが實じつふよく 何なん屋やの

くそーて 節ふしがよろうくお在いるううハ茶んハ
何なんうやーい 云こと話わでも 掛からまうハ 茶んといん
あ女めでも 丈も 来 小令せうれいもいふのふありまふよ
来 コレサハ 恥はさんいハ 加減かへんふ人ひとをも 持もて 望のぞく人ひとら
けを 踏ふく けでも 然しかより 代しろハ 喜よろこぶわうう
来 ハレ 然しかういふと 思おもひまうやア けあいつ 子実こじ
正ただ気き女めが 茶んのを 信しんぐ 来 こそ 悪わるく 思おもつと
居いるぶらう 来 アレモ 悪わる推おしをうう 云こといふと 云こといふと

のが六ヶ敷といふるぐん寛永可憐そうてありき
あのと津陽陽でも仕込んとて感てア母我のふあ
あるやうありううと思つておれあふんとやア
をてきりきりきりきりきりきりきりきりきり
何も取りかゝるせんやあうの決てうう那嬢の母
幾分いふる私の船はあうきいままとあやア
年頃ありきうう何年か且ねてもねえ
私もあうきいままとあやア
私もあうきいままとあやア

みるをてきりきりきりきりきりきりきりきり
やうなううきりきりきりきりきりきりきり
どいふやうなううきりきりきりきりきり
いふやうなううきりきりきりきりきり
あうきいままとあやア
あうきいままとあやア
あうきいままとあやア
あうきいままとあやア

そのけ延能といふ何れを始り長谷寺
親の寺内は後居て後居の栄ふ栄店を

さきく強慾非なる小金をりけり一板も栗
中くありけるが、栗が産後小惱り、お家紙
残りむね、おまにゆく誓約せし我より年
の十支むりも、老き男を伴ふく寺内を欠
あせしる、お三編小妻くく、足りま
よりく、かの栗ハ、伴の男と侶俱小所く
方くを遍中する、金ハ大方、お捨ふ、栗ハ
基より悪徳あり、男も不良老あれば、是より次

おふは、お生じて僅一年、まゝおふ、男とも別く
仕舞生後、是る縁、町小賣居あを、買求め、ね
び付る體といひ、女ま書一のりあれば、他小做べき
活賣も、あ、處女の時、おおひ、る、津、瑞、陽をさ
いひ、小お元、さ、沙、流、お、小、清、元、延、和、と、名、を
あ、く、さ、お、勢、古、雨、を、さ、う、め、し、お、お、免、お、ひ、に
け、さ、さ、お、外、面、人、毫、上、死、お、お、思、ひ、の、お、小、孫、判
よ、け、お、お、後、り、く、十、四、年、後、の、ご、く、お、書、せ、か

正真ふ師匠をきくのもて六余年の金もみら
ねば金持ちの息子様を自分の住居へ
迎えてよろしくおしなせしめしめしめし
悪ふあつて見より小方と糸三郎が不思議の
縁ゆゑを述べしをききしめしめしめしめし

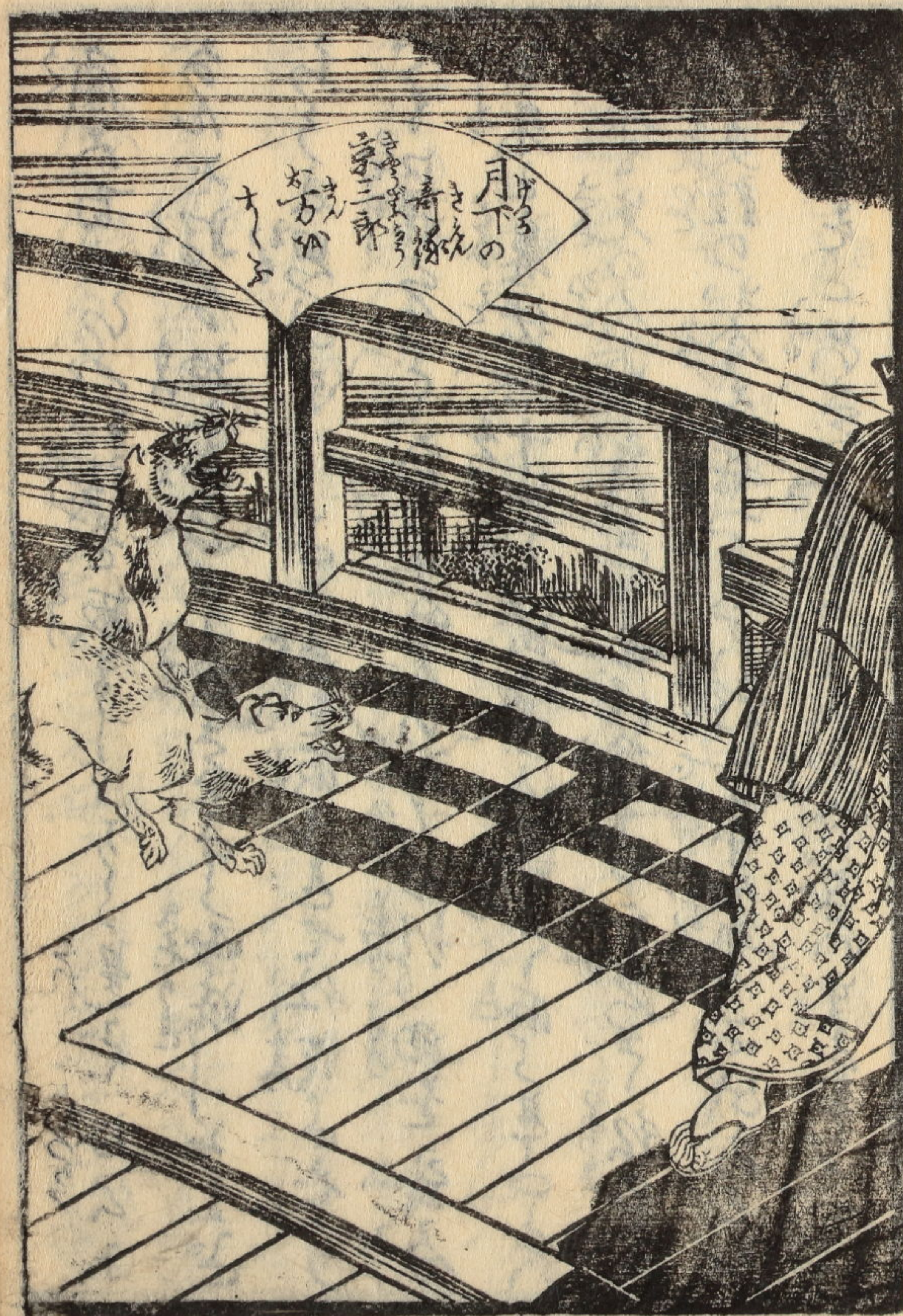
第九回

按之の笛や著々奏の音も途切し
糸三郎一個真巨槌の中程まで振りか
りし

しも年ハ十八十六の歳時けし見かねど最
しき獨りの少女袂を翻しあてし声をも
て泣居しをみるふふ安の晴され糸三郎ハ稍
あや後ろ小僧を現ふともかの少女ハあやも知
む程にさうさう居りし何思ひけん欄下小
とそを踏みけし身を沈めんとする程糸三郎ハ抱
し糸三郎ハ抱みし小僧はけし處女をさう抱
みし大娘も是れ小娘さう洞あつし小声をりあげ

娘 アレ何様ぞぞんどもせんが何卒此場を見通して
放しとく教しとく下さぬとト多ひつ振向くおとを
あはれを涙きとて照る月小入ハ教を見合せと アハ
赤八様町の延船さんの所(勢)赤八様の方きんぶアな
久ト言ひと娘もひつと一怒りお侍お前さんハ怒
町とやうの悪旦那でござのすま子系 アサ系三希ぶよ
そふくてもお前ア何とておを投やうとハおる
のふりとも死あふとすふ思ひつめは決あうとさで

めく六々あふでもあつうが不願あう金銀づ
て御やうあふあうはだん松が内お前お前ふり
やせううマををあつめく一通り仔細を叫くお
呉るせ(保)あんまり出るこ決り子娘ア玉置お
かふござのすま子とともどもけき居て云々けが
ござのすまきと私ハ家う是様をし居りまはヨ
系ハ決かあのとらハアとる決り子とるの事
あうちあふあふ及ぶあうと初めからちやア



あんまりさうも知恵ねえヨ初うさうちやア不談
みかうぶが私が生金を出して進もうと必し
程気なふをねいせト言ひあう情より金一両
を取りやう一糸の孝行を曲をまぢやア
世もふねお入進といけども今度アあいつ
合せがあらうア是丈あづかうと句ふの
お嬢さんとやうの部分御来と鼻緒履の方を代
拂いして貰つてさうせと母ア何ぞ要う喰ひせ
る

セトといつ金をさう出せばちかハるより怖
いさう焼く思ふと何とやうさう思ふと
流石に是を言うさう一室に思ふに有難い
すまじき事も思ふに金をいふてはさうの毒
ぢやないかお返さうと出さうと
是をうの金ををんあふさうとちやア却てけ
さの毒ぢやないかお返さうと何のそん
ぢやないかお返さうと何のそん

うふ思ふも掛ど頼め〜言結ふ娘の
膝く思ハ辞退もせに先を金を受けに死た
根ある盛のうちお供ありませヨ 来る程僅る金
でも貰つて思へば持のよくお抱えううマア借と思
つゝ居るさるがのまハ驚うと大さう救のわけこのふ
お前が懐くもてお母アが案ずる居るさるさううう
金を持ちて速く付るさるがの備へて彼是九ツ
あもあるのふ差の娘をけぬう頼りて懐くちア

途中ぞうすごんみ悪漢お出合う難儀をおめ
ともいふにねううけあがお米の宅のをあさる送
て進中う万エ更でわねうお金の毒ぐおあさるま
ううおハ頼りて買入るさるのまヨ 来るサせん
ふふお金急を〜万一とんあう同ふあつてさ
まを給方おのけさるおのけさるおのけさる者
同ふおあさるの外はさるのの知るねけしと
おふうう頼りて居る人ハあ〜いふやアおあ万ハア

さ
あうでいばいませんが子トきひうけく男のうを
ちよいとえあぐ始めく完承あひ入とあまの
毒ぐいばいませんをナニせんあふまをを
子へねくさく来あせくトきられくち方ハ何とや
きくた男と思ふ人離れとあれたよりきあと思
どそまふ系三系ふけく道をや英町近はく
おしも俄ふ下るむるふ二人ハ大まふ過
て系一サく大まふあく来く何ふく急き
て

デカ八上り

せへ係あ前の住居まぐけあが性めちやア聞が
クアねく五ナニ母アハ毎晩英の地主様の知人接
ふ系いぐ九ツるあけくバけりませんヨ英ま
居りませれば程宜くうきまはあ前さんふあ英
あうこふをけくせめくかれでもやさせませく
系イヤく母ア今英の地をねちやア接るまを種
ぶくあをりはけりふあてきく方が宜くうに
れの何のとせんあふあきく入くねくふと
ひうち

程^{ほど}ありおまんの家の門^{かど}はふありお万^{まん}門の戸^{かど}をさぐり
見^みる万^{まん}ヲヤ^や可^かなりぬきぐごのまをヨ今^{いま}私が戸^{かど}を
ぬきうち端^{はし}下^{した}へその戸^{かど}を濡^ぬるいさうふしそ^そお在^あるそのヨ
ト^いひつゝも^も通^とく戸^{かど}をお^おぬきと^と部^ぶを^を通^とへ^へと基^{もと}
のごうふ戸^{かど}を^を通^とく^くそ^そも^も侶^{りょ}め^めであがりける

春色傳家之花卷之十

